

教育課程論(12月1日)リアクション 多文化教育について(その1)



番号 15

1 井上茂先生のお話についての感想

- ・ 英語勉強(25万円くらい! 短期)
- ・ 英語勉強になる方法は、好きなもので興味湧かしていく!!
- ・ 2年かたでも英語の副免許に合うと知られてよかった。

2 前回(ジェンダーと教育)に関する討論の感想

女だから、男だからって社会心理学的な性別はだめって
おかってるけどそう簡単になくならないなと改めて思った。

3 テキスト 第10章(多文化共生と教育)で、提言されていること

マジョリティーとマイリティー 多文化教育
 多数派 少数派
 権力がある 権力がない
 決定権・力
 弱者 弱者
 (マイリティー) ☆日本人性-日本の中では強者

平等教育とは
ちよっとちがう

4 多文化教育のエッセンスは何か(松尾、佐藤参照)

1. 単一文化的視点
2. 比較文化的視点
3. 異文化間的視点 = 多文化教育学的視点

小学校教科書(国語) 内容比較
 アメリカ 「公正、自由、平等」
 「創造性と個性」
 「自尊心、強い意志などの個の重視」
 日本 「日暖かい人間関係」「配儀性」
 「人間関係の中で相手の気持ち考える」
 ※ 国によって考え方がちがうのちがう

曲かになるかも
 他の文化の子がいるからって、ちがった視点も見つけられる...!?

5 なぜ、異民族排斥、ヘイトスピーチが起こるのか。

理想論から排斥運動へ転換 - 自然な成り行きとして市民の間では
 反異民族感情が高まって、異民族への襲撃や異民族と市民の闘争事件が起きてる。

歪の意見

6 なぜ 国際理解が困難なのか、それを克服する方法は(「教育の国際性ってなぜ必要なの」参照)

★ 克服方法 ★

- ・ 外国の人々や文化への関心、大切にしようとする心をもつ
- ・ 異なった他者の思想、文化、を言語すること
- ・ あたりまえを共有しないものとの関係を築く

日本と外国のちがいを
世界史とか...
比較的文化言語

正直ムズカシイ...!

理想論
 移民はみんな
 といい人」という
 宣伝云々!!!

いれた後...
 金湯や暴動
 小生を犯した犯罪
 が 明らか

次週への課題 佐藤那衛「多国籍化する学校」(配布プリント)を読んでくること

おへておいて。
自分とは異質は存在に
目を向け、認めることが必要。
違いがあつていい!

教育課程論(12月1日)リアクション 多文化教育について(その1)

番号 /

1 井上茂先生のお話についての感想

教員になるために必要なスキルと情報を詳しく説明して下さいとのこと
自分の力にしたい。1年の時から積極的に取り組んでいくことが近道
になるだろうと感じた。
英語を副免としているので、より頑張ろうと思えた。

英語教育改革～
小学校：友達との質問
中学校：簡単な文が読める。
高校：話しての表現
→これを上回る教員を!

2 前回(ジェンダーと教育)に関する討論の感想

それぞれの「ジェンダー」にもつ意識の違いや考え方の違い
など学ぶことが出来た。今後の社会での男女差についても
学べている。

男と女は平等ではなく、
女側の目線で考える。

3 テキスト 第10章(多文化共生と教育)で、提言されていること

著者の立場は?
多文化教育で
大丈夫なのかな?

外国籍の子どもの増加 → マイノリティとマジョリティの力関係を克服。
* 平等とは違う働き
弱者の立場で考える。
↳ 外国と日本人性(日本の中では強者)の扱い

少数派 (弱)	多数派 (強)	= 多文化教育に
権力なし	権力あり	平等教育

4 多文化教育のエッセンスは何か(松尾、佐藤参照)

外国と日本の
違いと格差を
受け入れる

3つの視点
1. 単一文化的視点
2. 比較文化的視点
3. 異文化間的視点 - 多文化教育的視点

- ・ 自民族中心的な視野の克服。
- ・ 社会的公正な視点から、多文化共生社会の構築。
→ 世界には様々な考え方があり
- ・ それぞれの文化の尊重、理解
- ・ マイノリティの視点に立つ。

* 多文化教育
* これからの日本に
ついて理解するためにも
大切

特別支援とも
結びつける
通常のクラスで
お互いに豊かに

5 なぜ、異民族排斥、ヘイトスピーチが起こるのか。

自分から主体的に接することが困難な事柄に基づいて、個人対して集団を攻撃、
脅迫、侮辱すること → 難民や移民によるたび重なる暴動や犯罪が原因。
極端な偏見による国民の反難民感情。

6 なぜ 国際理解が困難なのか、それを克服する方法は(「教育の国際性ってな ぜ必要なの」参照)

多国籍性の中で
の考え、他国の
考え
を認める。

寛容さ: 異なった他者の思想、文化を許容すること。: 不快感をも受け入れる。
共生するものとして、他者を承認すること → 自分達との違いを認め、受け入れる
当たり前を強要 共有しない。

アフリカ
特性を
尊重

自分達と異質は存在は 稀に不快感を生み出すため。
それらを克服するためには、相手の文化などを受け入れる寛容さが重要。
統一が不可能でも、お互いを認め合う多文化教育
次週への課題 佐藤郡衛「多国籍化する学校」(配布プリント)を読んでくること

行
べきでは?

テキスト『教育の基礎と展開』第10章「多文化共生と教育」を読んで、145頁のlet's tryの3つの質問に答えなさい。(締め切り 12月1日、授業時に提出) (この用紙でも、ほかの用紙でもよい)

- 1 クラスに日本語の指導が必要な子ども(幼児・児童・生徒)が転入してくるようになった。あなたはどのような準備や対応をとるのか、個別の支援計画を考えてみよう。

子どもの都合が合えばだが、準備としては、入学前に授業や日常生活でよく使う日本語を簡単に指導する。入学後の対応としては、日本語教室のようなものを、放課後などに教員がついて行う。授業にわかりやすい絵や図、ものを使う頻度を増やす。

- 2 保育・教育のバリアフリー化やユニバーサルデザイン化のためには、いかなる環境構成、授業づくり、クラス経営を進めていけばよいかを考えよう。

内容ベースの言語指導の知見に学ぶことが考えられる。強化学習言語のニーズに応じて、教科の基本概念や学習方略を指導するとともに、分かりやすい日本語を使う、絵、図、物などを使い見えるように教える、明快な授業構成にする、丁寧に板書するなどの手立てを提供して、こどもが直面するバリアを取り除いていくなどの工夫をする。

- 3 多文化共生を進めるために、教師に求められることは何かを考えよう。

第一に、自分か中心主義的なパースペクティブをいかに脱中心化していくのかといった意識改革。まず、自らの自分か中心主義的な傾向に気付くことが求められる。そのうえで、自分とは異なる文化の見方や考え方を学び、文化的な他者の視点に立つことができるような多文化のパースペクティブを培っていくこと。

第二に、多様性と同質性についての敏感な感覚や認識を持つこと。第三に、共に生きるということへの決意や意思が必要。多文化共生社会に向けて、社会的公正の視点を持ち、相互理解を図りながら、協働的に問題解決していく責任ある未来の市民の育成を担っていくのだという決意や意思が求められる。

テキスト『教育の基礎と展開』第10章「多文化共生と教育」を読んで、145頁のLet's tryの3つの質問に答えなさい。(締め切り 12月1日、授業時に提出。) (この用紙でも、他の用紙でもよい。ワープロでもよい)

- 1. クラスに日本語の指導が必要な子どもが転入してくるようになった。どのような準備や対応をとるのか。

A. まず補助教員(通訳のために)を申請する。

外国の文化について学んで、日本との違いを知り、学校(クラス)に入る前にコミュニケーションをとりお互いの違いについて理解し、してあげる。転入生だけでなく、クラスの子ども達にも外国文化について理解して貰いたい。差をなくしたい。

日本も外国語が文化とすることは、世界には多くの文化が存在することなど、国際的に視野を広げたい。

外国語や文化の発表会を企画して取り入れるなど、積極的な環境づくりをしたい。

- 2. 保育・教育のバリアフリー化やユニバーサルデザイン化のためには、いかなる環境構成、授業づくり、クラス経営を進めていけばよいかを考えよう。

A. (A)からあるように、それぞれ自分の国や中心の意識をたかした。

学校の小さな掲示もどりの言語も取り入れて、わかりやすくしたい。他文化について理解するために、あいづつを促すこと。コミュニケーションを取る時に使うこと。他文化の書籍をたかした。

それぞれにわかりやすい授業にするように、授業中にもイラストや図解をわかりやすく、わかりやすいという不安を取り除けるように、よく見て進める。

(生徒の)

- 3 多文化共生を進めるために、教師に求められることは何か。

A. 自身の文化について、深く理解し、こころを

、他国の文化についても理解し、よくなる準備。

子ども達に、国際的に視野を広げようとするための環境づくり。

それぞれに関心をもてるようにする。

自分からの情報(日本、他国)を発信する

、他からの意見を理解すること。

テキスト『教育の基礎と展開』第10章「多文化共生と教育」を読んで、145頁のLet's tryの3つの質問に答えなさい。

- 1. クラスに日本語の指導が必要な子供が転入してくるようになった。あなたはどのような準備や対応をとるのか、個別の支援計画を考えてみよう。

まず、最初にやらなければならないことは、自分が持っているクラスに日本語の指導が必要な子供が転入してくることを伝えることだ。子供たちに状況を伝えることによって子供たちの心の準備ができると考える。私の計画は、生徒を班に分けて班別で生徒が日本語を教えていくといった指導法により、生徒は教えることで改めて勉強になり、転入生は日本語を学べると共にクラスメイトと打ち解けるきっかけになるのではないかと考えた。自身の対応としては、母国との関連をつながら日本の勉強をさせていき母国の感覚を忘れさせないようにしていきたいと考える。まとめとして、主に生徒が主体となって転入生を支援し、先生はサポートにまわる事が重要なのではないかと。

- 2. 保育・教育のバリアフリー化やユニバーサルデザイン化のためには、いかなる環境構成、授業づくり、クラス経営を進めていけばよいかを考えよう。

環境構成として、援助が必要な生徒を認知し受け入れる体制を整える必要がある。授業づくりとしては、援助が必要な生徒を中心として考えていきたい。その子が欠けている部分を学ばせ、教科の基本概念や学習方略を理解させるとともに教員側が最善の注意を払い授業展開をしていきたいと考えている。また、その後にそこから得た教育方法を一部にとどめておくのではなく全体に使えるように創意工夫をして誰もが理解し今後の力になっていく教育していきたいと考える。クラス経営としては、生徒同士がお互いに教え合い支え合うように誘導、指導していきたいと考える。

- 3. 多文化共生を進めるために、教師に求められることは何かを考えよう。

教師に求められることは一つの事にとらわれない考え方を考える。自分の考えていることだけを生徒に教えるという偏った情報になってしまう。全体を見る視野・考え方を身につけて教育の幅が広がる多くの知識を教えることができる。多くの文化が共存する中で一つにとらわれない事でそれぞれの文化に対応できるグローバルな人材を育成することができ、以上により一つの事にとらわれない考え方が教師に求められる事だと考える。

テキスト『教育の基礎と展開』第10章「多文化共生と教育」を読んで、145頁のLet's tryの3つの質問に答えなさい。(締め切り 12月1日、授業時に提出。) (この用紙でも、他の用紙でもよい。ワープロでもよい)

- 1. 幼児 日本語の指導が必要な子供が転入してくるようになった。どのような準備や対応をとるのか。

児童 日本語指導員に指導を依頼する。自分も学校生活に必要な言葉と教える。日本人の生徒には外国語活動や社会科の授業でその生徒の国を扱うことで文化を理解してもらい、授業では簡単な言葉を使いながら課題を提示することで、難しい言葉も知らずとも学習しやすい環境をつくる。

生徒 日本語指導員に指導を依頼する。スピーチ・時間や読書の時間として日本語を活用する機会を増やす。掲示物や配布物に日英が併記して何を書いているかわかりやすくする。授業では内容を簡単に要約したプリントを作るなどして自分のペースで学習できるようにする。

- 2. 異文化を尊重し受け入れるクラスを目指し、授業で海外の文化について扱った時には特に丁寧に扱う。日本文化についても自分達がどのような社会に生きているかを考えさせる。グループ活動や学校行事に積極的に参加することでクラス内に生徒同士が話しやすい雰囲気を作る。

- 3. 教師は、自分か中心主義からの脱出、多様性と同質性について敏感な感覚、共生への決意が求められる。

それらの下には、外国人の障がい者に関わり、お互いに理解し課題を乗り越えた経験が必要だと考える。

1. クラスに日本語の指導が必要な子どもが転入してくるようになった。あなたはどのような準備や対応をとるのが、個別の支援計画を考へてみよう。
2. 保育・教育のバリアフリー化やユニバーサルデザイン化のためには、いかなる環境構成、授業づくり、クラス経営を進めていけばよいかを考へよう。
3. 多文化共生を進めるために教師に求められることは何かを考へよう。

1. 外国人労働者の本格的な受け入れが現実的になるとして、外国人の子ども教育ニーズに応じて日本の教師がこれらの子どもを担任する可能性が高まっているため、これに対応の支援計画を考へていきたいと思う。まずは生活面について考へると、マイノリティとマジョリティの観点から、外国人というだけではない対象になり、可能性もある。例えば「ハーフの友達」が小学生の頃いじめにあったという話を聞いたり自分自身も天然パーマだのことでバカにされたりしたからだ。日本に住んでいる限り、日本の文化には触れない。他文化の人と接すると「異常」だと思ってしまうため、珍しいものではないことを理解させなければならぬと思う。学力の面では、外国人の子どもに合わせてクラス全体を見なければならぬ。それに特定の人物ばかりを見ていってしまうと思われ、難しい。そこで、授業の進度はあまり変えないようにして、外国人の子ども用に漢字やカタカナを添えて、英訳をのせたプリントを用意できると考へた。
2. 日本語を流暢に話していても授業についてくるのが難しい子どもが9割。それは外国人の子どもだけでなく日本人の子どもにも多いと思う。そのような子どもがいてこまるようにするには、教育のバリアフリー化やユニバーサルデザイン化がベストだと思う。そのために教科書を使いだして、絵や写真などを主につけて、言葉がわからなくても伝わりやすい教材を用意できると考へる。
3. 多文化共生というものは、元々国自体に様々な文化があれば、まだ理解されやすいと思うが、日本には単一国家をあり、文化の種類が限られているため、共存していくことの難しさも大きいと思う。まず、困難を乗り越えるためには、その事実を認識して、文化の違いを認めあいつつ共通のルールを見出すことがとても大切だと思う。ある文化の中に入ったら、それに従えという意見もあるかもしれないが、私たちが受け持つのはまだ幼い小学生をあるので、日本の子どもに多文化を認識させるという意見も含めて、多文化共生を進めることはグローバル化が進む上でもとても大切なことだと思う。まずは教師が自覚と認識をすべきだと考へる。教科書の言葉と引用する人間として、文化的・個人的な差異に気づいて、共生し、共存することを、日本社会の再構築を促している自覚がある人が教師になるべきだと思ふ。

1. クラスに日本語の指導が必要な子供(幼児・児童・生徒)が転入してくるようになったら、私はまず準備としてどのような理由で日本語の指導が必要なのかを分析します。例えば障害のため日本語の指導が必要な場合、生徒の障害について十分に理解ができるように障害の症状を詳しく調べます。それからどこまで指導が必要なのか保護者と生徒と話しあう程度把握し、本人への配慮やクラスへの配慮などの対応を考えます。他には外国からの転入生の場合、日本語をどこまで理解できるのかをテストや面接をして知り、別クラスでの日本語教育と在籍クラスでの指導を考へる。またクラスへの異文化理解の授業を行い異文化理解を深める。
2. 保育・教育のバリアフリー化やユニバーサルデザイン化のためには、まず障害のある児童生徒が安全でスムーズな学校生活を送れるために、個人個人に適した学校施設づくりを教員や保護者地域住民が一緒になって作っていく必要があると思います。授業づくりでは、障害がある人に対する理解を深める授業を行いみんなが過ごしやすい学校環境を作る必要があります。そのためにボランティア活動などを円滑に行うことができる地域や市町村との連携を強めていくべきです。クラス運営では、障害のある生徒への教材などの工夫やクラス内の施設の工夫、ほかの生徒への配慮を考慮し学級運営を考へていきます。また、学習面だけではなく生活面でのサポートも考へて学校全体が連携して支援できるような体制を作っていく。
3. 多文化共生を進めるために教師に求められるものは、固定観念や偏見にとらわれない物の考へ方だと思います。異文化を誰よりも早く理解しそれを生徒やほかの人に教えられる必要があると思います。その力を身に付けるために異文化を今のうちにいろいろ触れて新しいもの考へ方や新しい視点を増やすことが大切だと思います。最後に今回レポートを書いて、教育について改めて考へることができました。今後教育実習などに参加する際の心構えや指導案を考へるベースに今回の課題で考へたことを生かしていきたいです。読んでいただきありがとうございます。今後の授業も頑張っていきます。

1. 日本人にはなんでも周りに合わせてしまうような特徴があるため、これが普通であるという無意識のうちにできあがった価値観や視点を持った文化がある。しかし、人と違ふことを好む外には、このように日本の環境はとも生き苦しく良い環境では決まてない。教員には、そのようなことをしっかりと理解した上でどのような準備や対応をするべき考へる必要がある。本書では日本人性によって引き起こされる目に見えない文化を実践している環境を「カラスの箱」と呼んでいる。外国人はこの「カラスの箱」によって行動を制限され、枠づけされる。まずは 枠づけされた外国人の苦勞や辛さに日本人が気づかせることが大切である。そのためには私はクラスに転入してくる子の国について知っておけばいいと思う。その子がどんな環境で生活していたのか、その国にはどのような文化があるのかなどを教員が理解する。その上でクラスの児童にもその国について知ってもらい、またその国の挨拶なども覚えて練習しておく。転入してきた時その子はとても安心するだろう。このようにどれ程外国人が日本で生活するが不安定な思いが日本人自身で可視化して見ることがなによりも準備につながると思う。しかし、当然来てきたらその子の性格や学力によって、スムーズに進まない場面もあるし、コミュニケーションを取るのが難しくたりもする。そんな時に、その場に応じて日本語指導の教員や外国人の教員にも協力してもらいその子に合った方法を考へていけばいいと思う。

2. 日本語は話せても、授業にはついていけないといった外国人の児童のつまづきを把握し、支援するバリアフリー化は教科の基本概念や学習方略を指導することにもわかりやすい日本語を使う、絵・図・物などを使い見せる形で明快な授業構成である。また、いろいろな準備をすることがバリアを取り除くための工夫としてあげられる。このようなバリアフリー化を進むにつれて、外国人の課題を全ての児童の視点から再検討するユニバーサルデザインを進めたい。外国人にとって教科書学習言語のニーズに対応した支援はなくてはならないものである。そして日本人にとっても学習者の利益となる。つまりこれによってお互いに授けられる。さらに多様な価値観や個性を尊重し、全ての児童の学力向上を

多文化共生を生き抜く力を育成していくことにもつながる。

3. 教師に求められるものは3つある。1つは自文化中心主義的な考へ方からどう考へようという意識がある。私達日本人は日頃の全てを自文化の視点から考へている。つまり、外国人の視点で考へてしまふ。まずは、自らの自文化中心主義的な傾向に気づくことが求められる。その上で異なる文化の見方や考へ方を学び、多文化な考へ方を増やしていくことが求められる。2つ目は多様性と同質性について敏感な感覚や認識をもつことである。私達は一被敬の社会集団に所属している。時として日本人や外国人になる場面がある。また、人間としての共通性もある。異なる存在の異質性と等しい存在の同質性を両方持つ。このように多様性と同質性のあり様に敏感でなくてはならない。3つ目はともに生きるということへの決意と意思である。異なる他者を理解することは完全にできないのでそれを受け止めて、可能な限り理解しようとする意思が必要。グローバル化の加速とともに教師は多文化共生社会に向けて社会的公正の視点も、相互理解を図りながら協働的に問題解決していく責任ある未来の市民であるという決意と意思が求められる。

4. クラスに日本語の指導が必要な子ども(幼児・児童・生徒)が転入してくるようになったら、あなたはどのような準備、対応をとるのが、個別の支援計画を考へてみよう。

- ・ 学校の地図作成がある。そして一緒にまわる。
- ・ クラスの掲示物にふりがなをつけておく。(ムラがな、ローマ字)
- ・ 日本はこんなところ、学校周辺の地域はこんなところで、逆に転入校生の住んでるところとかのおたがいの紹介する。
- ・ スポーツとかその子の得意な事をして、ゲームなどで体験させて仲よくする。

5. 保育・教育のバリアフリー化やユニバーサルデザイン化のためには、いかなる環境構成、授業づくり、クラス経営を進めていけばよいかを考へよう。

- ・ 外国人がどんなに不自由があるように、道徳とかで日本語しゃべらないうえにゲームとか、その場の言葉紹介してみんな使ってみようって積極的に相手の気持ちもわかって自分たちも体験させてなにをしたら嬉しいかを考へさせる。
- ・ 黒板のばんしょは見やすいように、外国人の子には授業の最後にプリントにしてあげる。大きな字で
- ・ 車いすの子とかは、入口、出口の近い席にする。
- ・ 仲よい学級の先生とかにたまにお手伝い来てもらって、困ってるなと気づき発見できるようにする。

6. 多文化共生を進めるために、教師に求められることは何かを考へよう。

- ・ 英語とか外国語学など。
- ・ 言葉の最初の教へ方。
- ・ 相手を尊重する気持ちと理解しようとする優しさ。
- ・ 言葉の表現力の多様性。